

座 談 会

多様な価値観との 出会いが育む 共感力と創造力

—UWCから飛び立った新たな時代の担い手たち

出席者

UWCカナダ校卒業生(1993年)／ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン代表理事

小林りん こばやしりん

UWCインド校卒業生(2009年)／国際協力銀行(JBIC)企画部門調査部

吉田千紘 よしだ ちひろ

UWCイギリス校卒業生(2013年)／経団連国際教育交流財団産業リーダー人材育成
奨学生(2018年)／ブルームバーグニュース東京支局速報部

横山恵利香 よこやま えりか

UWCコスタリカ校卒業生(2020年)／ESCP Business School(フランス)在学

姜文熙 きょう ふみき

【進行役】UWCイギリス校卒業生(1979年)／UWC卒業生会会長

あいおいニッセイ同和損害保険副社長

赤林富二 あかばやし とみじ

ユナイテッド・ワールド・カレッジ (UWC) における教育の特徴は、「多様な価値観の人々と共に学ぶ」ということである。十代後半の多感で吸収力と柔軟性の高い時期に2年間、世界中から集まった学生達と切磋琢磨し共同生活を送るという経験は、何ものにも代え難いものであろう。持続可能な社会を実現するためには、多様な価値観を持つ人々と出会ったときに生まれる「共感力」と「創造力」を育むことが必須となる。それらの経験を経て、世界に飛び立っていった卒業生は、どのような道を歩んでいるのか。

ここでは、世界各地のUWC校(カレッジ)を卒業した新たな時代の担い手たちに、留学を決意したきっかけや、そこで得た経験、価値観、UWCで学ぶ魅力などを語ってもらった。

(記事中の写真は出席者より提供)

小林 まず、留学を決意したきっかけから伺いたいと思います。カレッジへの派遣時、日本の高校に在学中だったと思いますが、その時点で、将来の夢を具体的にイメージされていたのでしょうか。また、いくつもの留学プログラムがある中、なぜUWCを選んだのか、その理由も併せて教えて下さい。

それでは、小林さんからお話しただけですでしようか。

小林 どんなふうにも夢を思い描いていたか、改めて卒業文集を確認してみました。小学校の文集には、「政治家(憧れの人物はペレストロイカを断行したゴルバチョフだ)」と書いていました。中学校の卒業文集には、「外交官」

国際社会にも 貢献できる人材になりたい

赤林 本日は、UWCへの留学を通じ、皆さんが派遣されたカレッジでどのようなことを学んだのか、そこでの体験が、その後の進路や職業にどのように影響していったのかについて、お話しいただきたいと思います。それぞれ、学ばれた時期や国もカレッジも異なりますので、いろいろなお話を伺えるのではないかと楽しみにしています。

高校時代に 留学を決めた理由

とありました。漠然と、世の中のためになる公的な仕事に就きたい、できれば日本だけでなく、国際社会にも貢献できる人間になりたいと思っていた記憶があります。こんなふうに書いていたのか、と感慨深かったです。

正直なところ、半分は現実逃避でした。私は国立大学附属の進学校に入学し、入学直後の三者面談から大学入試を意識した内容で、欠点や苦手分野の克服ばかりを推奨されて辟易としていました。自分の得意分野に光を当ててくれる教育を求めた結果が、留学という選択だったのだと思います。その頃、目をかけて下さった英語の先生にUWCを勧められたのが、受験のきっかけです。

途上国での唯一無二の経験

赤林 吉田さんは、インド校への派遣を当初から希望したと伺いましたが、その背景などをお話しいただけますか。

吉田 小学生の頃に米国で生活していたこともあり、元々海外留学に関心がありました。中でもUWCは、異文化理解や社会課題の解決といった理念のもと、世界各国から集まった生徒と共に生活するというのが特徴的で、唯一無二の経験ができるのではないかと、思い応募しました。

中学生になり、貧困下で教育が受けられない途上国の人々の様子をテレビで見るようになり、将来はこうした問題の解決に携



Profile

小林りん こばやし りん

UWCカナダ校卒業生(1993年)／ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン代表理事

高校在学中、UWC日本協会の奨学金を受けUWCのカナダ校に留学。東京大学経済学部、スタンフォード大学教育学修士、イェール大学グリーンバーグ・ワールド・フェロー。当時、メキシコの貧困地域を訪れた体験から、大学で開発経済を学ぶ。卒業後、外資系金融機関を経て、UNICEF職員としてフィリピンの貧困層の子どもの教育支援に携わる。2014年インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢(ISAK)開校。同校は2017年にUWCへ加盟、現在の校名となる。2015年日経ウーマン「ウーマン・オブ・ザ・イヤー大賞」、2016年財界「経営者賞」受賞。



Profile

吉田千紘 よしだ ちひろ

UWCインド校卒業生(2009年)／国際協力銀行(JBIC)企画部門調査部

2009年にUWCインド校を卒業、米国シカゴ大学に進学し経済学を専攻。大学卒業後はKPMG LLPに就職しニューヨークとアムステルダムにて勤務、日系企業の海外事業を支援する移転価格コンサルティング業務に従事。その後、ハーバード大学院国際教育政策学修士課程を経て、2018年に国際協力銀行(JBIC)に入行。入行当時は営業部にて中南米地域を担当し、メキシコの電力公社向け融資案件や再エネ事業を手掛け日本企業の海外電力事業を支援。現在は調査部にて地政学情報を収集するとともに、サステナビリティファイナンスやSDGsへの取り組み等の世界的潮流の調査を担当。



Profile

横山恵利香 よこやま えりか

UWCイギリス校卒業生(2013年)／経団連国際教育交流財団産業リーダー人材育成奨学生(2018年)／ブルームバーグニュース東京支局速報部

UWCイギリス校を2013年に卒業後、京都大学法学部に進学。大学卒業後は、産業リーダー人材育成奨学生として、オックスフォード大学大学院社会学部に進学、2019年卒業。在学中にはテレビ朝日ワシントン支局、ニューヨーク・タイムズ東京支局、ジャパンタイムズ等、様々な形態の報道機関でインターンシップを経験。現在は、ブルームバーグニュース東京支局の速報部記者として、日本・北東アジアの政治経済、企業、金融ニュースを中心にグローバルに配信している。



Profile

姜文熙 きょう ふみき

UWCコスタリカ校卒業生(2020年)／ESCP Business School(フランス)在学

2001年東京都生まれ。在日華僑二世。横浜山中華学校小学部を卒業後、横浜にある私立中高一貫校、聖光学院中学校・高等学校に進学。高校2年次に同校を退学しUWC日本協会奨学生としてUWCコスタリカ校に留学。2020年に卒業後、3年間で欧州3都市を移動しながら学ぶESCP Business School(フランス)に進学。現在、同大学マドリッドキャンパスの2年生。
LinkedIn: <https://linkedin.com/in/wenxi-jiang-12693b1b0>



Profile

赤林富二 あかばやし とみじ【進行役】

UWCイギリス校卒業生(1979年)、UWC卒業生会会長／あいおいニッセイ同和損害保険副社長

東京大学経済学部にて低開発経済のゼミに所属。卒業後、日本生命保険に入社。会社派遣でハーバード経営大学院にMBA取得。その後、ニューヨークにて勤務。主に国内外の企業・政府関係機関・プロジェクトへのファイナンスの企画や営業、米国での資産運用事業や中国・インド等での生命保険事業の企画や管理、年金基金や個人向け運用商品の開発やその運用・販売に従事。ニッセイアセットマネジメント社長、日本生命保険副社長を経て現職。資産運用を主に担当。

■ 国際バカロレア (IB: International Baccalaureate)

国際バカロレア機構 (本部ジュネーブ) が1968年に設置した、世界共通の基準を持つ国際教育プログラム。大学進学前の2年間に実施される教育課程「IBディプロマプログラム」を修了し、終了試験に合格すると、世界の多くの大学で入学資格として認められる。同プログラムには、主要科目 (言語、社会科学、自然科学、数学、選択科目) のみならず、知の理論 (TOK=Theory of Knowledge) を探求する一般教養、卒業論文、社会奉仕・クラブ活動 (CAS=Creativity, Action, Service) など含まれており、学業だけに片寄らない、バランスの取れた学生を育成することを目的としている。現在、世界159カ国・地域の5500校以上で実施されている (2021年8月現在)。日本では「成長戦略2021」 (2021年6月閣議決定) において、国内における国際バカロレア認定校等を2022年度までに200校以上にすることを目標としている。

※詳細は、国際バカロレア機構 (<https://www.ibo.org/>)、文部科学省IB教育推進コンソーシアム (<https://ibconsortium.mext.go.jp/>) のホームページ参照

わることができないかと漠然と思っていたので、UWCでもインド校への派遣を希望しました。UWCのキャンパスは、都心部から離れた大自然の中に位置するところが多いのです。インド校もその例に漏れず、ムンバイから車で3時間半ほどのブネという学園都市の近郊にあり、市内から車でさらに1時間ほどの農村の丘の上にありました。学校周辺にはサトウキビ畑や掘っ立て小屋の集落が広がり、子ども達が、はだしで走り回っていました。そのような環境の中で、私達留学生も次第に順応し、はだしで生活するようになりました。UWCでなければ、このような生活に飛び込む経験はできなかったでしょうし、途上国が抱える課題を目の当たりにすることもなかったと思います。その点、インド校を選択し、そこで2年間を過ごせたのは、とても貴重な経験でした。

ジャーナリストとの出会い ―自分の目で世界を確かめたい―

赤林 横山さんは、どうだったのでしょうか。
横山 元々国際交流に関心がありましたが、決断の決め手となったのは、1人のジャーナリストとの出会いでした。当時通っていた高校で卒業生による講演会があり、新聞社の特派員の方がゲストとして登壇されたのです。南アフリカ共和国でアパルトヘイトを取材されていた記者で、アフリカ諸国の現状につい

て語ってくれました。日本で16年間平穏な毎日を送ってきたので私にとって、その内容は大変ショッキングなものでした。その時に私も、日本の外側に広がる世界を知りたい、自分の目で確かめたいと強く感じたのです。それから海外留学について調べ始めました。UWCはその中でも、他の留学プログラムと一線を画す特別なものだと感じました。97カ国から集まった360人の学生と2年間、寝食を共にし、学び合う。その刺激を想像すると、挑戦せずにはいられませんでした。

同時に私は、ジャーナリストを志すようになりました。「確かに、報道記者は目の前で倒れている人の命を救えるわけではない。しかし、自分の発信したメッセージがたくさんの人の目にとまり、大勢の人を動かす原動力となれば、世界に変革をもたらせるかもしれない。そういった可能性を秘めている仕事だ」という、先述のジャーナリストの言葉を聞き、私も報道に携わりたいと思うようになりました。

華僑としての自分と 異文化や多様性への好奇心

赤林 姜さんは現在、フランスの大学に進学されていますが、留学への気持ちは子どもの頃から強かったのでしょうか。

姜 中学生の頃は、まだ留学を強く考えていませんでした。高校生になる直前にシリコン

バレーを訪問し、研修を受ける機会があり、それがきっかけで海外での大学進学に興味が生え始めました。

華僑として日本に生まれ育ちましたが、私自身の生い立ちや、中国文化に関心を持ってくれる学校の先生や友人が多かったことで、中学生の時に、周りの協力を得ながら、「中国語研究会」という同好会を立ち上げたのです。友人らが参加してくれて、中国語を楽しく学ぶ交流の中で、文化を分かち合うこと、お互いに理解することの喜びを知ったのだと思います。また、家族とよく海外旅行に行っていたので、さらに異文化や多様性に好奇心を抱くようになりました。

高校1年の時、家族からUWCのことを教えてもらいました。自分の未知なる領域に挑戦する絶好の機会だと思い、受験を決意しました。

その時点では、自分のバックグラウンドを活かした日中関係の懸け橋になる仕事や、世界平和に貢献できるような仕事をするのが夢でした。いろいろな国を旅したり、ボランティア活動をしたりする中で、貧困等、様々な問題を目の当たりにし、将来はそれらの問題解決の一役を担いたいと強く思うようになったのです。

赤林 留学を決意したきっかけはそれぞれ異なっていますが、皆さんその頃から志が高く、明確な将来ビジョンをお持ちだったことに驚

きました。

〔UWCは、国際バカロレア (IB) に則ったカリキュラムを採用しており、このIBのディプロマを取得するためには、一般教養科目の履修、卒業論文 (Extended Essay) の提出のほか、社会奉仕やクラブ活動 (CAS: Creativity, Action, Service) への参加が必須となる。〕

2年間のUWC生活で 学んだこと

赤林 世界中から派遣される留学生と寮生活を2年間共にするところに魅力を感じていた、というお話がそれぞれありましたので、ここでは寮生活やCASなどを通じた様々な交流の中で学んだことを中心に伺いたいと思います。横山さんからお願ひできますか。

日常に潜む 圧倒的差異と向き合う

横山 私が派遣されたイギリス校では、多種多様なCASに加え、ナショナル・イブニング、平和会議など、地球規模の課題や未知の文化を学ぶ機会に溢れていました。しかし、私が特に衝撃を受け、心を動かされたことは、むしろ何気ない日常の中に潜んでいたように思えます。

仲の良かった友人に、日本のアニメや漫画

が好きなパレスチナ人がいました。ある日の放課後、彼と数学の課題に取り組んでいた際に、「そんなに日本文化が気に入っているなら、一度日本に遊びに来たらどうか」と提案したことがありました。すると、彼はとても悲しそうな表情でうつむきながら、「自分はレバノンの難民キャンプの出身で、パスポートを所持しておらず、今も特別な書類を使って英国に滞在している。自由に動くのは難しく、もちろん日本に行くこともできないだろう」と答えたのです。

在学中、日々のたわいない会話の中で、どう言葉を返せばよいのか分からず、うろたえた瞬間が何度もありました。エイズで両親を亡くし、妹と祖母を養ってきたカンボジア人の先輩や爆撃で家族を失ったイスラエル人。大陸を転々としてきたが故に自身のアイデンティティが分からないと嘆く友人。学内で最も足が速かったのにマラソン用の靴を買う余裕のなかったエチオピア人。自分と全く異なる環境で生まれ育った友人に囲まれて、彼らは何を思い、何を背負って生きてきたのか深く考えさせられたのです。

UWCで濃密な時間を過ごす中で、私は強くなったと思います。不都合な事実から目をそらすのではなく、困難と向き合う力を与えてくれた2年間でした。

理想と現実のギャップに悩み 試行錯誤を繰り返した

赤林 続いて、吉田さん、お話しいただけますか。

吉田 私はインド校に留学しましたが、CASの一環で子ども達に英語を教えるため、キャンパスの近くに住むダリット（カースト外にいて不可触民と捉えられている人々）のコミュニティを訪れたことがあります。ところが、勉強を教えるところではなく、元気な子ども達に砂や草を投げ付けられて、残念ながら引き返してくるようになります。理想と現実のギャップを前に自分の無力さに落胆しました。それでも、この活動を共に立ち上げた友人らと、「集落との交流を続ける意味は何か、部外者である自分達にできることはないのか」と議論し、考え抜いて、試行錯誤を繰り返した経験は、深く心に残っています。

UWCインド校ではCASのSをServiceと捉えず、Community Interactionと位置付けていました。それは途上国の農村で、高校生の「奉仕(serve)」で人を救えるほど現実には甘くないという考えによるものです。恵まれた人が弱い立場にある人を助けるのではなく、互に対等な立場で接することによって初めて、双方にとってプラスになる交流が生まれるものだからです。現地での体験を通じて、そのような関係性のあり方を学びました。

思いを言葉で 伝えられないつらさを知る

赤林 続いて、カナダ校に行かれた小林さんは、留学先でどのようなことが印象に残っていますか。

小林 私は、受験英語以外に英語に触れる機会がなかったため、留学当初は全く英語を話せず、聞き取ることもできず、苦勞しました。そのような中で仲良くなったのが、同じく英語で苦勞していたメキシコ人の友人でした。彼女が夏休みで帰省する時に、「メキシコの実家に一緒に行かないか」と誘ってくれたことがあります。1カ月間のスペイン語集中講座を受講しようと思って、メキシコシティに滞在しました。

そこで目の当たりにしたのは、貧富の格差と機会の不均等でした。その実態を見て、言いたいのではない憤りを感じたのを今でも鮮明に覚えています。日本に生まれ、学校に行くのが当たり前、1日3食を食べられて当たり前と思つて育ってきたのですが、世界全体を見れば、それは恵まれたほんの一握りの人間だけであることを痛感しました。いつか、機会の不均等や貧困の負の連鎖を断ち切るような仕事をしたい、と心に誓ったのです。

日本では、生徒会や学級委員を任せられ、バスケットボール部に所属する活発な生徒でした。ところが、UWC在学中は、英語が全く

UWCには、多様な国籍や宗教、経済環境の生徒が集まっています。それらの違いを乗り越えて相互に理解し合い、社会をより良くしたい、という同じ信念を持っています。その意味では、多様性の中にも、共通点があるのです。

UWCを卒業して社会に出た時に、偏見を持つ人、変化を望まない人、個人の利益だけを追求する人に初めて巡り合います。UWCの教育は、そうした壁に突き当たっても、UWCで蓄えたエネルギーを原動力にして、自分の思い描くビジョンを実現させていく力を与えてくれたと思います。同じ理想を掲げて日々課題解決に取り組んでいる仲間が世界各地にいることも、大きな励みになっていますね。

心を開いて相手を受け入れる

赤林 それでは、最後に、コスタリカ校に行かれた姜さん、UWCでの学びをどのように捉えていますか。

姜 一言で集約すると、「心が豊かになったこと」に尽きます。学業から得るものも無論多かったのですが、様々な人と出会い交流する中で、多くのことを学びました。

第1に、異なる価値観が共存する中での相互理解の大切さです。入学して2カ月たった頃に、中国の本土出身者と台湾出身者が対立する場面がありました。友人である彼らの間に立てる立場にいるはずなのに、何もできな

できず、全校集会では結局2年間殆ど一度も発言することなく、カフェテリアでも大きなテーブルを囲んで座るのが苦手で、いつも隅っこの少数人数テーブルに座っていて、それまでの人生で最もつらい2年間でした。それでもメキシコでの体験があったおかげで、謙虚になり、言葉を発しない人の「声」にも耳を傾け、人の痛みが分かるようになったように思います。

また、両親への感謝が非常に強くなったのもこの2年間でした。私がどんなに英語や勉強で苦勞して泣き言を言っていたても、両親は一度も私を責めることなく、「ベストを尽くして、それでもダメなら、帰っておいで。どんな結果になっても、りんは我々の子なんだから」と受け止めてくれました。私は家族という礎があるからこそ、今日まで自由に生きてこられたのだと、その時初めて明確に理解したように思います。

英語ができず勉強にも苦勞した2年間だったので、卒業の時は「ようやく終わった!」という喜びがなにより大きかったのを覚えています。また、いろいろな友達に支えられたことで「何とかサバイバルができた」のも事実です。大変な時期であっても、人に支えてもらえれば何とか生き延びられるという経験が、自信につながったのは確かです。その後の大学受験も、IBの修了試験に比べれば楽なもので、殆ど苦になりませんでしたね。

い無力な自分がやるせなく思いました。しかし、最終的には話し合いで解決することができ、対話の重要性を改めて感じた瞬間でした。あの時の出来事が、後に日中青年会議を開催することになるきっかけの一つになりました。自分と違う価値観と触れ合う中で睨み合うのではなく、敬意を持って互いの良いところを活かし補い合うのが大事なのだと思います。第2に、今まで人ごとだったことを我がこととして捉えられるようになったことです。生い立ちの異なる人と生活を共にする中で、多少の軋轢が生じるのは「当たり前」です。ルームメイトとの些細な喧嘩や、すれ違いがあっても逃げずに真正面から本音をぶつけ合う環境が、相手を思いやり、我がこととして



(注)日中青年会議：UWC香港校にて主催される7日間のサマープログラム



横山 UWC卒業後は京都大学法学部に進学しました。その後、経団連国際教育交流財団の産業リーダー人材育成奨学金を受け、オックスフォード大学大学院で社会学を学びました。その間もジャーナリストになりたいという夢は変わりませんでした。

ただ、同じ記者という職業でも、留学前に考えていたような海外支局の特派員ではなく、日本や北東アジアのニュースを世界に発信する記者の方が、自分の経験や強みをより活かせるのではないかと考えるようになりました。UWCと大学・大学院を経て日本人としてのアイデンティティを自覚するようになったからだと思います。

オックスフォード大学大学院の社会学専攻

には25人の学生が在籍しており、国際色豊かな環境でした。経済格差や女性の権利、犯罪学、Brexit(英国の欧州連合離脱)の影響などをテーマにコースメイトと議論や研究を行いました。その中で私は、自身の見解を述べる際、無意識に日本的な見方で物事を捉えていることに何度も気付かされました。欧米系の理論を扱うコースでは、これにコンプレックスを抱いたこともありましたが、同時に私の強みでもあるように感じられるようになりました。「世界の縮図」のような場所で、日本人、アジア人としての見方を示すことにも価値があると考えるようになったのです。

また、課題活動で参加していた学生新聞のチームでは、編集会議で「国際面」の追加を提案したことがありました。「オックスフォードには世界中から学生が集まっている。多様な見方も反映した方がいい」という私の声も採用され、それまで英国内と大学のネタで溢れていた紙面に、世界のニュースも掲載されることになりました。英国出身でもなければ、英語もネイティブではない。弱気になったことも度々ありましたが、他の人とは違う自分の特性を活かし、認めてもらえたことが自信につながりました。これらの経験から私は、内側から外側へ、日本から世界に向けた報道に携わることに使命感を抱くようになりました。

現在は、ニューヨークに本社を置くブル

認識する原点になったのだと思います。

第3に、前向きでいることです。事前のオリエンテーションのときに、ここにおられる小林さんが、「悲観は気分、楽観は意思」というフランスの哲学者アラン(本名・エミール・オーギュスト・シャルティエ)の言葉を引用されたのを覚えています。悲観的になりがちだった私は、この言葉に助けられました。

私が派遣されたコスタリカには、スペイン語で「Pura Vida」という挨拶の言葉があります。直訳すると「純粋な人生」という意味です。今でもこの言葉を口にする、ポジティブでリラックスした気分になります。国籍や信条を超えて仲間と共に過ごしたUWC時代は、私にとってまさに「Pura Vida」でした。「楽観的に心を開いて相手を受け入れよ」という姿勢の重要性に気付かせてくれた言葉なのです。

赤林 ありがとうございます。皆さんのお話から共通して言えるのは、個人や地域の固有で異なる背景や立場、価値観の存在とそれを対話などを通じて理解し尊重する心、姿勢をUWCで学んだ、ということになるのではないのでしょうか。

カレッジ卒業後の進路と夢の実現

赤林 それでは、カレッジを卒業した後、進

学や就職に際して、どのようなことを重視されたのでしょうか。また、今後、挑戦したいことなどがあれば、併せてお話し下さい。現役の大学生である姜さんからお願います。

コスタリカでの2年間と、大学生活で深化した思いを胸に

姜 大学を選択するにあたり、重視したことは主に3つあります。

1つ目に自分が挑戦できる環境、2つ目に多様な価値観が集結した環境、3つ目に自分が学びたい専攻です。米国と英国の大学からも合格通知をもらい逡巡しましたが、フランスのESCP Business Schoolに進学しました。

UWCコスタリカ校での経験から、漠然と国際関係学や生物学にも関心があったのですが、3年間にロンドン・マドリード・ベルリンの3都市を移動して学べるのが決め手になりました。さらなる挑戦ができ、多種多様な価値観に出会えると思ったからです。まだ見ぬヨーロッパ大陸の文化にひたり、探索する好機になると考えたのです。結果的に現在、大学で経営学を専攻しています。将来必要なスキルを身に付けるだけでなく、グループワークを通して、多様なバックグラウンドを持つ仲間と学び合い、刺激的な日々を送っています。

自分の将来像に関しては、UWCを志願した時と基本的には変わっていません。UWC



を卒業し、実社会にも踏み出してみて、より明確になりました。

ロンドンではボランティアとして、貧困層など社会的に恵まれない子ども達に授業を行うプログラムに携わりました。将来は国連等の国際機関に籍を置き、大きなスケールで、不公正な社会システムを改善できればと思っています。そのためには、学生時代に知識や経験を積み努力を重ね、いずれば日本で、これまでお世話になったコミュニティに恩返しをしたいと考えています。

日本から世界へニュースを発信

赤林 続いて、横山さん、吉田さん、小林さんの順でお願いします。

ームバークニュースの東京支局に勤務しています。当社は、世界120カ国に拠点を持ち、金融・経済、ビジネス情報を世界中に配信しています。私は速報部の記者として、日本の政治経済、企業関連のニュースなどを幅広く取り扱い、速報を打ったり、記事を書いたりしています。ニュースとして価値があるのは何か、迅速に見極めて配信することが求められます。

そして、これからも記者の「道」を追求したいと考えています。国際政治や環境問題・人権問題など、グローバルかつ長期的な視点が求められる課題に、日本やアジアがどう向き合うべきか、世界中の読者に発信し問い続けるため、言葉を紡いでいきたいと思っています。UWCやオックスフォードで出会った志の高い友人達と肩を並べ、国際的な舞台で活躍できるようにになりたいと思っています。

経験を積み、日本企業のSDGs取り組み支援へ

吉田 途上国の持続的開発に携わることに関心があったのですが、まずは民間セクターで経験を積もうと思い、米国でコンサルティング会社に就職しました。日本企業とは異なり、入社1年目でも即戦力として結果を出すことが求められるので、短期間で仕事を回すスキルが身に付いたと思います。その後、大学院に進学し、途上国の教育政策について勉強し



ました。果たして本当に援助という形で途上国に関わる仕事がしたいのか悩みました。

UWCインド校で学んだCommunity Interactionの精神とコンサル業界で培った経験から、自分がやりたいのは、途上国や新興国の持続的開発につながる相互に利益のあるビジネスの拡大だということに思いが至り、11年ぶりに日本に生活拠点を戻し、国際協力銀行(JBIC)に就職しました。JBICでは、以前から電力や鉄道など海外のインフラ開発に携わる日本企業をサポートしています。2021年6月、新たに発表した第4期中期経営計画(2021~2023年度)では、SDGsなど社会的課題の解決を重要項目として位置付け、医療や衛生環境、食糧システ

ム(フードバリューチェーン)等の分野におけるソーシャルインパクトファイナンス(ホスト国の社会的課題の解決に資する事業支援)にも注力していくことを掲げています。国連が掲げるSDGsは、援助等の公的資金だけでは決して達成できないものであり、多くの日本企業が既に取り組みを進めています。まだまだ手探り状態ですが、海外でも日本企業がSDGsに積極的に取り組める機会を創出できるよう、知見を培っていききたいと思っています。

また、何年後になるか分かりませんが、いずれインドに戻り、現地の人が自分達の力で課題を解決できるようにする活動をしたという夢も持っています。

社会の変革に挑める チェンジメーカーを育てる

小林 日本に戻ってからは、公的機関で国際的な仕事に就きたいと思い、東京大学経済学部を選び、開発経済学のゼミにも入りました。ところが、就職活動のOB・OG訪問で、私のことをよく知る先輩方から「公的機関には向かないのではないか」と言われました。理不尽なことが嫌いで「おかしいことはおかしい」と先輩にも真正面から食ってかかっていた私のことを心配してくれたのだと思います。それで方針を180度転換し、外資系企業だけを対象にして、就職活動をしました。組織

SAKを活動の中核に据えながらも、この目標に資するプロジェクトには積極的に関与していきたいと思っています。2020年からはUWC国際理事を拝命しており、その職務も全うすることで、UWCへのご恩を次の世代につないでいきたいと考えています。

日本初のUWC加盟校・ ISAK設立

赤林 皆さん、ありがとうございます。それでは日本で初めてのUWC加盟校となったISAKの設立について、実現までの歩みや苦心したことなど、小林さんから詳しくお聞かせいただけますか。

小林 ISAKの設立は、苦労の連続でした。2008年に帰国して、3週間後にリーマンショックが起き、20億円あるはずだった資金が200万円になるという衝撃的なスタートから始まりました。代わりの20億円をくれる人を見つけるために奔走したので、2年以上全く成果が生まれませんでした。2010年に「1人の資産家が創るのではなく、100人のファウンダーが共に創る学校」という考え方に着想を得て、1人1千万円、100人の大口寄付者を募り始めました。

ようやく10名ほど集まり、トンネルの先に光が見えたかに思えた2011年、今度は東日本大震災が発生します。数十名の篤志家の方々からいただいた約束が全てキャンセルと

なり、また振り出しに戻ってしまいました。2012年に100人のファウンダーが集まるまでに、2500名ほどの方々に寄付のお願いに回りました。

資金面以外にも、日本の高等学校としての認可を受けるために、様々なハードルが立ちました。9月入学の実現、9割を占める外国人教員の教職免許の取得、持続的な奨学金給付を可能にするための「ふるさと納税」の奨学金基金への適用など、多くの行政関係者の力添えを得て、何年もかけて一つのハードルを越えてきました。

おかげさまで今は、80カ国以上から200名の高校生が集まる、日本では類を見ない多様性のある高校となっています。新型コロナウイルスで国境が閉鎖され、海外留学が困難になる中でも、2020年度の受験倍率は6倍で、日本で最も倍率が高い私学の1つになりました。2020年4月発行の業界紙(K12 Digest)において「Top 10 Boarding Schools in Asia」としても表彰されました。卒業生は個性豊かで多様な進路を選択し、世界に羽ばたいていきます。

繰り返しになりますが、UWCカナダ校での経験がなければ、今日の私はありません。経団連会員企業の皆様のご支援には、何度感謝を申し上げても足りないと思っています。また、今に至るまでの多くの方々のご支援にも感謝したいと思います。

がフラットで、若い頃から実力で評価され、大きな仕事を任せてもらえるという点に惹かれました。当時は、数年働き修業を積んだ後、貯めたお金で大学院に行って国際機関に就職したいと考えていたように思います。

その後、回り道を経て、スタンフォード大学の教育学部で国際教育政策学の修士を取り、国連児童基金(UNICEF)へ就職しました。現実にある圧倒的な格差と汚職を目の当たりにしたことから「それぞれの立ち位置から社会の変革に挑めるチェンジメーカーを育てる」という現在の夢にたどり着いたのです。それを実現するため、2008年にUNICEFを辞して帰国した後、インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢(ISAK)の設立に向けて奔走し、2014年、開校にこぎ着けました。2017年には、ISAKは世界で17校目のUWC加盟校となります。30年前、UWCカナダ校で落ちこぼれて泣いてばかりいた私が、日本におけるUWC設立という任を担うことになるとは思えない運命です。あの2年間でなければ、私は間違いなく今ここにいません。奨学金で支援して下さった経団連会員企業の皆様に改めて心からお礼を申し上げます。

今後も、教育をライフワークとし、画一的になりがちな教育の世界に、子ども達の個性と同じくらい多様な選択肢を創り出すことを人生の目標にしたいと考えています。常にI

■ 卒業論文のテーマ

- | | |
|----|---|
| 小林 | 日本語Aを選択し、「三島由紀夫とドストエフスキーの美と破壊の概念」と題して、『金閣寺』と『カラマーゾフの兄弟』を中心に、善と悪、愛と拒絶、などを両者がどう捉えているかについて考察 |
| 吉田 | 近くの公立学校とNGOプログラムでのジェンダーの扱い方についてインタビューを通して比較調査し、インド農村部における効果的な女性エンパワーメントのあり方を模索 |
| 横山 | 東日本大震災があった2011年にUWCに入学したこともあり、地震に関連する話題が現地でも特に注目されていたことから、「なまずの地震予知能力」をテーマに生物分野で研究 |
| 姜 | 「中国本土と香港特别行政区を巡る『一国二制度』の持続力に対する評価」を題材に国際政治の分野で研究・執筆。2019年7月に香港を訪れた際に、民主化デモによる厳しい情勢を目の当たりにし研究を決意 |

皆様のご支援は、一人の生徒の人生を変えるだけでなく、その先の何百人、何千人という人にも、影響を与える奨学金になっています。引き続き、日本協会へのご支援をお願いしたいと思います。

日本の企業や経済界に期待すること

赤林 最後に、日本の企業や経済界に期待することについて、それぞれお話しただけですか。

姜 社会での実務経験が少ない学生という立場で恐縮ですが、企業や経済界が、持続可能な社会を目指した取り組みや社会問題の解決に向けた活動について積極的に情報を発信してほしいと願っています。

近年、グローバル化が進む中で、日本でも



「多様性」という言葉をよく耳にするようになり、徐々に国内で変化が見え始めているように思っています。その一方で、実態が伴わず、その言葉自体が空回りしているのも事実です。現状では、まだ移民やLGBTQ+等のマイノリティーも完全には受け入れられていないように感じます。そうした課題をメディアだけが取り上げるのではなく、企業や経済界が連帯して情報を発信することで、さらに議論が活性化し、その結果として人々の意識が変わっていくのだと思います。

SDGsは一人では成し遂げられる目標ではないからこそ、連帯が必要であり、その連帯こそが、異なる価値観の共存しやすい豊かな社会につながるのだと信じています。

吉田 COVID-19の世界的蔓延で、他国の医療事情は自分達にも影響し、また地球温暖化を阻止するためには自分の国だけではなく、世界各国でエネルギー移行(使用時にCO₂を排出しないエネルギーへの転換)を実現させなければなりません。このように世の中は本来つながっていることを身近に感じるが増えています。様々なグローバル・チャレンジに立ち向かうには、UWCで培ったような共感力とソリューションの創造力を実社会で役立たせる必要があります。

UWCに限らず、海外への留学や、進学や就職を1年遅らせて好きなプロジェクトに取り組むギャップイヤー、また転職によるキャ

リア変更など、多様な価値観を育む経験は数多くあります。1つの型にはまらない生き方をしている人を積極的に社内に取り入れ、彼らが活き活きと社会に貢献できる場を提供することが、これからの経済界に求められるのではないでしょう。

また就職後も出向やサバティカル(長期休暇)を通して、多様な価値観に触れる機会を創出し、組織としてだけではなく、個人としての成長を促すような取り組みを続けることによって、少しずつ多様性が豊かになり、持続可能な社会の実現に貢献できる人材が育っていくのではないかと思います。

赤林 私自身、経営側の一人ですので、今日伺ったお話は大変参考になりました。他の人とは異なる価値観や経験を持つ人の意見に耳を傾け、そのような人材を社内で活かすことが、企業の長期的な持続的成長につながることはよく論じられています。今回の座談会で、その確信をさらに深めることができました。

UWC卒業生のように世界で活躍し得る貴重な人材が、日本でも存分に力を発揮できる場を積極的に提供することによって、日本企業がさらに成長し、発展することを願っています。本日はありがとうございました。